

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

⌚ 2025年8月29日(金) 10:30 ~ 11:48 🏠 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

## [3a1205-08] スポーツ人類学／口頭発表③

座長:鄭 稼棋(東京理科大学)

10:30 ~ 10:48

[12人-口-08]

修行文化としての武術

現代中国における道教と武当山武術の接点

\*張 卿<sup>1</sup>、張 逸軒<sup>1</sup> (1. 日本体育大学)

---

10:50 ~ 11:08

[12人-口-09]

天真体道にみる統合的身体運動文化の構造

トランスモダン視座による青木宏之の体技思想の分析

\*関口 遵<sup>1</sup> (1. 日本体育大学)

---

11:10 ~ 11:28

[12人-口-10]

応援団コスモロジー

女性リーダーの誕生とその文化継承

\*瀬戸 邦弘<sup>1</sup> (1. 鳥取大学 高等教育開発センター)

---

11:30 ~ 11:48

[12人-口-11]

大阪市大正区における沖縄空手の流入と実践の現在

\*豊島 誠也<sup>1</sup>、田邊 元<sup>2</sup>、小木曾 航平<sup>3</sup> (1. 広島大学、2. 富山大学、3. 九州大学)

---

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

⌚ 2025年8月29日(金) 10:30 ~ 11:48 🏠 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

**[3a1205-08] スポーツ人類学／口頭発表③**

座長:鄭 稼棋(東京理科大学)

10:30 ~ 10:48

**[12人-口-08] 修行文化としての武術**

現代中国における道教と武当山武術の接点

\*張 卿<sup>1</sup>、張 逸軒<sup>1</sup> (1. 日本体育大学)

道教における修行体系は、古来より坐禅、吐納、導引術といった内的修行法が重視されてきたが、武術もまた精神的修養の一環として位置づけられ、長年にわたり実践されてきた。なかでも武当山においては、道教思想と武術が密接に結びつき、独自の修行体系が構築されてきた。しかし、武術が宗教的修行の中でどのように位置づけられ、いかなる形で実践されているのか、その思想的背景および身体的実践に関する包括的な考察は、これまで十分には行われてこなかった。

現代中国において、武当山は国家的文化遺産や観光資源として広く認知されているだけでなく、武術が現代的なスポーツ文化の一部として制度化・普及される動きの中でも注目を集めている。その一方で、武当山は依然として道教修行の聖地としての機能を保持しており、宗教的实践と観光・スポーツ的利用とが交錯する場となっている。このような現代的文脈において、武術が修行の媒介としてどのように継承・展開されているのかを検討することは、伝統文化の再解釈および宗教実践の現代的変容を理解するうえで重要な意義を持つといえる。

本研究では、スポーツ人類学的な視座に立ち、フィールドワークを主要な調査・分析手法として位置づける。調査拠点としては、武当山道教協会、武術協会、武当山国際武術学院、太和宮、紫霄宮などを設定し、武術を修行の一環として実践している道士や修行者に対するインタビューを通じて、彼らの思想的認識および実践的知見の収集を試みる。また、道観や武館における日常的な稽古の観察を通じて、身体実践の具体的な様態を記録・分析する。さらに、研究者自身が武術修行に実際に参加し、身体的・精神的変容を内在的に体験することで、参与者の視点を取り入れた多角的な理解を目指す。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

⌚ 2025年8月29日(金) 10:30 ~ 11:48 皿 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

**[3a1205-08] スポーツ人類学／口頭発表③**

座長:鄭 稼棋(東京理科大学)

10:50 ~ 11:08

**[12人-口-09] 天真体道にみる統合的身体運動文化の構造**

トランスモダン視座による青木宏之の体技思想の分析

\*関口 遵<sup>1</sup> (1. 日本体育大学)

本研究は、青木宏之が創始した身体実践体系「天真体道」の理論的分析を通して、近代および後近代の枠組みを超える統合的身体運動文化の可能性を明らかにするものである。天真体道は、型・組手・瞑想などの稽古を通じて、身体・霊性・関係性の一体化を志向する独自の実践体系であり、競技スポーツや伝統武道の制度的文脈から距離を取りながら、青木自身が「体技」と称する統合的営為として展開されてきた。

本研究ではまず、1990年代中盤以降に「ニュースポーツ」論や「ヴィジョナリースポーツ」論を提起した稲垣正浩の理論を批判的に検討する。稲垣は霊的身体経験の意義を評価しつつも、バタイユの「非知」概念などポストモダン理論に依拠したことにより、宗教や霊性の積極的統合には至らず、理論的抽象性と脱構築的批判にとどまった。これに対して本稿では、ケン・ウィルバーの「含んで超える」原理に基づくトランスモダンの視座を導入し、青木の思想と実践を分析する。

分析の結果、天真体道における型の創作実践、「天地人々ワレ一体」概念、「天真」思想は、前近代的霊性・近代的合理性・後近代的多元性を包含的に統合しており、稲垣理論が抱えていた宗教・霊性の排除、前後誤謬、理論的抽象性といった限界を乗り越えていることが明らかとなった。とりわけ天真体道は、霊性と身体性、個別性と普遍性を結び直す「統合的身体運動文化」を体現し、「体技」の実践哲学を具体化している。

本研究は、近代・後近代を超えるトランスモダン身体運動文化のモデルを提示し、現代スポーツ人類学に新たな理論的地平を拓くことを目的とする。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

■ 2025年8月29日(金) 10:30 ~ 11:48 ■ 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

**[3a1205-08] スポーツ人類学／口頭発表③**

座長:鄭 稼棋(東京理科大学)

11:10 ~ 11:28

**[12人-口-10] 応援団コスモロジー**

女性リーダーの誕生とその文化継承

\*瀬戸 邦弘<sup>1</sup> (1. 鳥取大学 高等教育開発センター)

本発表では、応援団文化を近代に構築された日本文化のひとつとして注目する。応援団では継承される伝統を重んじ、護る事を中心的関心事とするため、時に時代錯誤と揶揄される事にもなるが、それは学校空間が育んだ「集合的記憶」とも考えられ興味深い。本発表では応援団が如何なる文化的価値を醸成してきたのか、特に器としての身体に注目するものである。

現在、応援団はリーダー部、チアリーディング部、吹奏楽部という3部で構成されるがリーダー部はその中心的な存在となる。ところで、これまでリーダー部には「男性しか所属できない」という“しきたり”が全国的に認められ“聖域”として理解されてきたが近年その様子に変化が見られ多くの女性リーダー部員が誕生する事になるのだが、実はリーダー部という“聖域”には人類学でいうところの王権観に似た、もしくはそれに通じる世界観による安定と忌避があったように考えられ興味深い。

たとえば応援団長とは役職を超えて団全体を象徴する存在と理解される。彼らは歌舞伎役者のように「名跡」を継ぐものでありそこで受け継がれてきた「歴史」と「誇り」、「魂」を継承する存在なのである。団長という存在を文化人類学的視点から視ればそれは応援団と言うミクロコスモスと団組織というマクロコスモスの紐帯として存在し「応援団コスモロジー」とも言うべき世界観の中心に位置する“王”なのである。

ところで、“王”たる「器」になるためには、この国で育まれてきた歴史や文化の枠組みが求める枠組みに沿う事が求められそこには男女に求められる文化的役割も含まれ、女性がリーダーを行うべきか否かという議論の中心はいつもここにある。一方で日本社会も時代の流れとともに緩やかに変化し女性リーダーが誕生し応援風景も変化した、女性リーダーの誕生とは社会の変化に伴い「器」としての身体への眼差しの基準が変化した結果なのである。

■ 2025年8月29日(金) 10:30 ~ 11:48 ■ 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

**[3a1205-08] スポーツ人類学／口頭発表③**

座長:鄭 稼棋(東京理科大学)

11:30 ~ 11:48

**[12人-口-11] 大阪市大正区における沖縄空手の流入と実践の現在**\*豊島 誠也<sup>1</sup>、田邊 元<sup>2</sup>、小木曾 航平<sup>3</sup> (1. 広島大学、2. 富山大学、3. 九州大学)

本発表の目的は、大阪市大正区における沖縄空手の流入に関する歴史的背景を明らかにするとともに、過去から現在に至るまでの沖縄本島との交流の中で、空手がどのように実践されてきたのかを分析することである。

大正区は「リトル沖縄」とも称され、第一次世界大戦後の経済的困窮を背景に、多くの沖縄県出身者が移住した地域である。特に1920年代の深刻な食糧難の時期には、沖縄本島北部および南部から多くの人々が大阪へと移り住んだ。当時、大正区周辺では紡績産業が発展しており、労働力を必要としていたことから、沖縄出身者は大正区を中心に定住するようになった。現在においても、大正区の人口のおよそ4分の1が沖縄にルーツを持つとされている。確かに、街の通りには沖縄由来の名前の表札や沖縄物産店、飲食店が並び、シーサーの置物なども見られるなど、街自体に沖縄文化が色濃く根付いている。

そういった背景の中で、大正区には沖縄空手の道場も根付き、沖縄本島と同様の様式で空手が実践されている。発表者が現地調査を行った道場では、剛柔流国際空手古武道連盟を基盤としており、稽古においては沖縄本島の本部道場の指導方針に基づき、基本動作や型に加えて、棒術やトンファーなどの沖縄由来の古武道も積極的に指導されていた。これらの稽古内容は、本部道場との継続的な交流によって確認・共有されており、空手は常に沖縄本土とのつながりを意識した中で実践されている。また、毎年開催される大正区のエイサー祭りでは、空手道場による演武が披露されており、沖縄空手はエイサーや食文化と並んで、大正区という沖縄移民社会における重要な文化表現の一端を担っている。

本研究では、第一次世界大戦後に沖縄空手が大正区に流入した歴史的背景から現在の実践に至るまでの過程を、文献調査および関係者への聞き取りを通じて整理し、沖縄本島と大正区との「つながり」に関する考察を行うものである。